

超昂大戦 二次創作SS  
眠れルビー、愛する  
人の腕の中で！ ～心  
を喰らうニセ河童～

環 藍河

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

▼「原作」超昂大戦エスカレーション・ヒロインズ ▼その日ダイビート基地では、いるはずのない人物の目撃情報が相次いだ。キリカは継彦を、ナリカはタカマルを…？

▼正体は東北から上京した少女・カノ。愛する人の姿に見える能力を持ち、魔女の精密検査を受診するため基地を訪れた。 ▼その能力から嫌われ、引きこもる彼女を優しく包む、エスカチームや戦士たち。 ▼しかし、カノの真の能力にいち早く気づき、その支配を企てる悪の手が迫る。インキュブラーに吞まれ、カノは基地を出る。 ▼時を同じくし、エスカ・ルビーが襲撃を受ける。在るはずのない、その敵の正体は…!?

# 目次

前編 河童少女のココロのスキマ

1

後編 撃ち碎けれビー！ 愛を偽る錬金

術

16



# 前編 河童少女のココロのスキマ

窓の外はゲリラ豪雨。

基地の屋根からはウオーターフォール、センターコートには小川のパレードコース、そんな即席のウオーターアトラクションがサプライズ登場する、そんな夏の昼下り。

ぷしゅうつ。

「トキサダさん!! センパイはどこ!?!」

血相を変えて司令室に乱入、ずかずかとトキサダに詰め寄るのは、神騎キリエルこと、報生キリカ。

「…? 今は君たちの元の世界に、帰っているだろうか?」

「嘘っ!?! …じゃあ、さっきのあの人、誰だったの!?!」

…

…

慌てふためくキリカを静止し、順を追って見たものを説明してもらおう。

どうやら、彼女の想い人・中央継彦に酷似した人物を、基地内でついぞ発見。息を呑んで二度見を試みるも、行方を見失ったらしい。

オルタナスタインとの戦いが明け、沙由香・ハルカ・エリスは一時の休暇として……できれば、できるだけ長く……トキサダの中に居るそれぞれの想い人ともども、元の世界に戻している。

一方、キリカはアカリの……エスカルビー・アステライズの飛行訓練コーチとして、少しこちらに残ってもらっていた。

「ねえっ、今日ここに来るお客さん、全部把握してるでしょ？ センパイみたいな人……うん、どつかの世界の同一存在が、トキサダさんの他にきているのかもしれないっ！ 教えて！」

ぷしゅうっ。

「長官さんっ！ 何で……何でタカマルがいるのよ!?!」

「ナリカ……？ タカマルはハルカと戻っているだろ？」

「だって私、絶対にタカマルを見間違えたりなんかしないっ！」

ぷしゅうっ。

「トキサダさんっ！ ズルいですよ、あんな大きくてモフモフのワンちゃん、ダイビートに連れてくるなんてええっ！ 何で私にあらかじめ教えてくださらないんですかああっ!?!」

「ちよ……長官っ！ もしかしてサブライズなの?! さっき広場でヤルトラマンNOOB

が、NOOB様がつ!!」

…どうやら、幻として視える対象は、人限定ではないらしい。

それにしても、メイファールはともかく、身長20mのNOOBが見えて、何一つ疑わないうららはアホの子なのか、一周廻って大物なのか。

…

…

「紹介しよう。魔力因子を保有する可能性があり、検査のためダイビートで一時保護することになった。」

「ふ…深浦、カノといます…よろしくっス…」

東北なまりの強い、アカリたちより少し年下くらいなの、素朴な少女。

「雨の日や沢の近くで彼女と会々と、見る人には自分の大事な人の姿に見えるという。状況説明からは、河原や溪流で悪戯をするという河童に近いが…。東北の夏祭りを手伝うため現地を訪れていたツルコが、話を聞いて俺に報告してきた。」

「み…皆さんさ、ご迷惑、かけたっス…!」

「検査結果次第では、ダイビートでの長期保護になるかもしれない。みんな、仲良くしてやってくれ。」

超昂戦士には積極的に夏季休暇を取ってもらっているため、今日の待機は先のキリ

カ・ナリカ・メイファールにエスカチームを加えたくらいで、他はほとんど非番。

「わあっ！ 新メンバーだあ！ カノちゃん、よろしくねっ！」

「アカリ、話を聞いていたか？ 検査結果次第では、早く帰ることだつてある。ずっと居ると期待して、空振りになると辛いぞ。」

「それなら、なおさらだよ！ 一期一会、短い期間でも、ダイビートのいいところ、いっぱい見て触れてほしいな。何でも私たちに聞いてねっ！」

「あつ…、あ、ありがとなっス…」

(☒)「はあ…っ…」(☒)

キリカもナリカも、メイファールもうららも。

一度燃え上がった希望が萎れた4人は、魂ここに在らず。

(…精密検査が決定して長期滞在になった場合、課題は、チームリバスと接点を持たせないことだな…)

いちばんの想い人と不幸に引き剥がされた、ユカと春霞の二人。雨の日や川べりでふと出くわしてしまい、偽物と知ろうものなら、カノの生命の保証が無い。

トキサダは当面、カノを自室待機とし、外出を晴天の日に限ると厳命した。

一方。

(…河童…かな…？ …な〜んか、良くない予感がするのよねえ…)



エリーの違和感は、確証を持ってないまま彼女の中でくすぶっていた。そこへ。

「やあ、これはこれは、恋人殿。」

「ル…ルカ?! あなた、こっちに居たの?」

NAUの錬金術師にして、ミミックの魔力因子を持つ魔女、ルカ・ペルサキス。ダイビット基地でも安定の、セパレートの下着の上から薄衣のネグリジエ姿で、談話室に参上。

「同輩から、魔女因子の同定検査を受注した次第さ。費用はクラリス経由の請求ゆえ、公明正大・清廉潔白。安心し給え。」

「ウチもおりまつせー。今回は水辺で能力発現する子の検査やさかい、このマーフオークのプカルルさんの真骨頂! ひと肌もふたエラも、脱ぎまつせー!」

…

…

医務室で早速、カノの検査が始まる。…と言っても、頬の内側の細胞採取による遺伝子検査と眼底検査、それに身体検査に問診と、至って普通のオーダー。

…ただ、検査官が普通じゃないだけだ。

「ふむ、東洋人ながら、大陸系の特徴も散見。肌の白さが際立つとは、実に興味深い。」  
…とネグリジエ姿で全身くまなくカノの外見的特徴をなぞる錬金術師。

「ひゃー、カノちゃん、ゆーたっけ？ あんなー、雨の日とか、脇下やあばら骨とか、ムズムズしたり、開いたりとか、あらへん？ …あ、河童や言うてたね。ほな、頭頂部のつむじ辺りとか、手指足指の水かきとか、どない？」

…と、関西弁でまくしたてる白衣の錬金術師。

最新の医療機関でMRIや科学的検査を施されると思っていたカノにとつて、想像の斜め上に行く検査。

（と…都会のお医者様つて、こんつなにスケツスケな格好なのが、当たり前なんだべか？ わ、わだしの言葉…通じなかつたら、どうしよう…？）

そして。

「最後の診察だが、接現力の簡易検査となる。」

「ホンマは実際に、トキサダくんにDチャージしてもらて、魔力変化を測定するんがええけど、初診でそれやとペイシエント・ハラスメントやからなあ。」

「カノ君、一般の婦人科でも卵子や精子の活動観察程度の、センシティブな医療行為が必要とされる。これもその一環さ。方法は一任する。」

「カノちゃん、自己チャージでも、ご希望ならウチが補助することも可能やけど…もしかして、意味わかつてはらへん？ …あんな〜。」

(い) (こよ) (こよ) (こよ…)

「…あつ、あああつ、あいいい〜〜つ!?」

プカルルちゃんの、甘々ところろハチミツ教室。

…

…

「カ…カノちゃん、検査、大丈夫だった?」

「…と、都会つて、しつたげ、凄えかつたつス…!」

…何があつたかは、患者のプライバシーのため、特に秘す。

…

…

カノは食堂で、先の7人にご馳走したいと、ジングスカン鍋を取り出す。ルカとプカルルは検体検査中、トキサダとユーノは司令室待機で帯同断念であった。

「ご…ご挨拶代わりつス。お口に合うモンだか、自信ねえつスケど…」

「わああ〜つ、私もここで、初めて皆さんと食べたのが、お魚の鍋だったんですよ! カノさん、もうお友達、確定ですね!」

鍋と聞いてメイファールの素敵な思い出が蘇り、先刻までわんこモフモフの夢破れたしょんぼり顔だったのが嘘のように、ぱあああつと顔に赤らみが戻る。

「あーつ、あたし知ってるーっ! 河童伝説の遠野の人つて、ウールを獲る羊をいっぱい

飼ってたから、ブリキのバケツでコンロ作って、その上で野外ジンギスカン鍋、みんなでやるんでしょー？ あたし、ラムもマトンもイけるクチよっ！」  
うららの指摘は大ハズレで。

カノがクラーラーボックスから取り出したのは、ビニール袋入りの豚モツぶつ切りと、これまたぶつ切りのキャベツに、「豆腐。

「う……うららさん、そもそも、わ……わだし、岩手の遠野の出身でねえっスよ？ 出身は秋田の鹿角（かづの）つつつて……」

河童で有名な遠野は岩手県南部の山間部の市。

対する鹿角は秋田の北東部、十和田湖に近い山間部の市である。

当然、鹿角に河童伝説もジンギスカン文化も無い。

「は……はあーっ!! じゃ、じゃあ、そのジンギスカン鍋は、何なのよーっ!!」

「あ……これでわだしん家、ホルモン鍋、食うんですけど……。」

…

プラネタリウムの天球のような、もしくは彩色すればそのまま北欧海賊が兜として頭にかぶりそうな、黒光りする鉄製ジンギスカン鍋。

…これで、ホルモン煮込み鍋？

「に……ニセモノよーっ!! NOOBもニセモノ、出身地はいつも河童と関係ないニセ

モノ、鹿角つてどこよーっ?! あんた、フェイク属性盛りすぎでしょーっつ?!」  
 「そ…そんなこと、言われても…」

カノがホルモンを鍋のてっぺんから流し込み、ジンギスカン鍋のへりに豆腐を整列。キャベツを鍋蓋代わりに上から被せて、蒸し焼きを始める。

居酒屋メニューのような煮込みホルモンではなく、ニンニク唐辛子味噌仕立てのホルモンは、天球部で焼くか、へりに落ちた肉汁混じりの甘辛いタレで煮込むか、どちらも味わい深い。

「なっ…何コレっ?! 白ごはんに合うっ!」

「お豆腐も、汁気を吸い込んで、濃厚!」

「わあ…これはさすがの私も、再現困難…でも、タカマルやハルカさんにも食べさせた  
 いっ!」

「れ…冷凍なら通販、あるっス…。」

「か…河童はニセモノだけど、この味はホンモノ…ねっ。わ…悪かったわ。」

「あ…き、気にしねえでくださいっ。がつり、食ってければ、嬉しいっス…。」

キリカやメイファール、ナリカもエスカチームも、初体験の鍋に胃袋を掴まれ、為す術もなく完食。

「☒【(ぎ)馳走さまでしたー!】☒」

「お粗末さんでした。へば、食器と鍋、洗うスから、そのまま置いておいて下さい。」

「ダメっ！ 働かざる者、食うべからず、だよ。みんなで片付けよー！」

「『おーっ!!』」

下膳と皿洗いが人海戦術で手早く済むも、焦げたタレがびっしり付いたジんギスカン鍋は、アカリのガッツ全開でも手強い。

「アカリさん、それ、コツがあるっス。わだしき、貸してけれ。」

「じゃあ、任せるね。」

「はあ…こんなに大勢で食べたの、何年ぶりだべ…。皆さん食って下さって、ありがとさんでしたあ。」

カノのつぶやきに、誰ともなく反応する7人。

「えっ？ 給食とか、友達と遊びに行ったりとか、無かったの？」

「わだし…子どもの頃からこの力…水際でわだしのことが、別の人さ見える力…。気持ち悪がられて、学校さ行ってもみんな近寄らなくて、わだし、そのまま学校、行かなくなっただっス…。母ちゃんはいつも『大丈夫だよ、あんだが行きたくなければ、ずっとウチにいていいんだよ』って言ってくれたっスけど…。」

カノがうつむき気味に続ける。

「だども、母ちゃんだって内心、わだしのこと、きつと気持ち悪いはずなのに…。親戚も

気持ち悪がつて、家さ寄らなくなつてしまつて、母ちゃん、わだしのせいで、自分も一人きりになつて…。」

カノの眼が潤む。

「もしも私が、母ちゃんには死んだ父ちゃんに見えてたりしたら…：わだし、唯一そばさ居てくれる母ちゃんにも、残酷なこととして、いっばい我慢させでしまつてる…：ううつ…！」

…

「あのさ…：カノちゃん。お母さん、何一つ、我慢なんかしてないと思うよ。」

「ふえつ？ …：アカリさん？」

「だつて、カノちゃんももしも私の妹なら、私はぜつつたいにカノちゃんを護るもん。私、弟がいるけど、もし学校で一人きりになつちやつたら、必ずそばにいて、私が味方だよ、一人じゃないよ、つて言うと思う。自然と、そうしたいと思つて動くよ？ カノちゃんのお母さんも、おんなじ気持ちだと思ふなあ。」

「…：うう…。」

「それにカノちゃんの力つて、川や沢のそばでカノちゃんが、その人の大好きな人に見えるつていうんでしょ？ だつたら、お母さんにはカノちゃんがそのまま、カノちゃんに見えているんじゃない？」

「…：えつ…？ …：あ、あいいー…！？」

耳まで真っ赤に染めて、赤面するカノ。

「カノ…お前、今までご母堂様に直接聞いたことは無かったのか？ 自分が誰に見えるか、と」

「き…聞けなかったっす…。聞いたら、親子の関係も壊してしまいそうだったスから…！」

「あつ…！ す、すまない、無神経な問いだった！」

「いえ、なんともねえス。…はあ…！」

ヒビキの問いに答えながら、再び鍋の汚れを落とす手に力を込めるカノ。

その力みすぎの理由は、7人全員が解っていた。

…

…

（はあ…、たった半日で、いろんなことがあったなあ…）

ゲストルームでシャワーを浴び、床につくカノ。

ぼかぼかするのは、鍋やシャワーだけが理由では無かった。

（母ちゃんなら、わだしのこと自然と護るよ、わだしがいちばん好きだから、そのまま見えてるはずだよ、か…。考えもしながつだなあ…）

一人で何年も煩悶した問いへの答えを、あつさり出されてしまった。



(アカリさん…地球を救ったスーパーヒーロー…なのに、田舎から出てきたばっかしのわだしのこど、こんんなに親身になって考えてけるなんて…)

母子二人のすれ違いが産んだ心の空白を、アカリ始めダイビートの人々は、あつさり埋めてしまった。

(…ううつ、母ちゃん…！)

検査結果が出たら、真つ先に伝えよう。

帰ったら、親孝行、絶対しよう。

小さな決意を胸にまどろむ、カノ。

だが、その決意は、汚れた爪に引き裂かれる。

(ケヒヒヒッ、探したぞお、見つけたぞおっ！ その力、我が野望の糧なりいっ!!)

(はっ！ …ひいっ!!)

ゲストルームへ闖入する、禍々しい鼠。

そのままカノに瘴気を吐き出し。

「あ…あああつ、くくくっ！」

骸羅骸羅のときはヒヨウほどもあつた、漆黒の獣。しかし、カノの眼前の鼠…インキュブララーを後天的に、人為的に小型化した獣は、やがて少女の善意を制圧し。

彼女の真の因子が、その邪な性質を発露する。

…

…

ほぼ、時を同じくして。

「ご同輩、カノ殿の因子の正体、有意水準0.01で検証、確定したよ。」

「…こんな深夜に告げねばならないほど、危険な因子、ということか。」

「ご明察。」

「トキサダくん、アレはめっちゃ危険やあ!」

「彼女の因子は、河童でも、そもそも日本妖怪の類いですら無い。

あれは…ギリシャ神話の水棲妖魔。

リュムナデスの因子だよ。」

「なっ…!!」

ビーツ、ビーツ、ビーツ!

「緊急警報。パトロール中のエスカ・ルビーが正体不明の敵と交戦中。場所はD W 5 W、  
門川上流部。待機中の戦闘スタッフは、至急援護に急行して下さい!」

続けざまに、戦闘中のルビーの音声が入電。

『そ…そんな、なんであなたが…きやああああつ!!』

ルビーの悲痛な叫びは、爆発音にかき消された。

【後編へ続く】

## 後編 撃ち砕けルビー！ 愛を偽る錬金術

ニンプの亜種・リユムナデス。

水際に縄張りを構え、近づくと人間に見せる幻は、見る者の最愛の人。

ある者へは、父を、母を。

ある者へは、思い告げられぬまま、生き別れとなった異性を。

ある者へは、遠い土地で逞しく育つ息子や娘、孫を。

だが、その喜びは一転、別離の涙と消え、水底へと沈む。

リユムナデスはその幻で人間を虜にし、自らの獲物として喰らい尽くす。

その外道の所業から、魔女の間でも恐れられ、かつてはやむなく同志を捕縛し、水の無い砂漠に捨てた陸の孤島で生涯軟禁するしか無かった。

「魔女は、因子を持つ子が生まれる可能性のある家庭を、監視しているんじゃないやなかったのか?!」

トキサダの詰問に答えるルカとプカルル。

「落ち着け、ご同輩。3世代以上魔力が発現しない血筋は、箱船ではマーク人員を十分に割けなくなる故に、一旦監視を外すんだ。然るに、隔世遺伝や先祖返りで稀に、それ以

上の間隔を置いた発現がある。カノ殿の事例はそれだよ。」

「すぐにもカノちゃんを保護せんと！ 万が一幻魔やインキュブラーの手に落ちたら、えらいことなるでえ！」

「ビーツ、ビーツ、ビーツ！」

「緊急警報。保護中のゲスト・深浦カノが、ゲストルームから失踪！ 正門から脱走したもよう、全スタッフは至急、捜索に参加して下さい！」

そして。

「緊急警報。パトロール中のエスカ・ルビーが正体不明の敵と交戦中。場所はD W 5 W、門川上流部。待機中の戦闘スタッフは、至急援護に急行して下さい！」

続けざまに、戦闘中のルビーの音声が入電。

『そ…そんな、なんであなたが…きやああああつ!!』

ルビーの悲痛な叫びは、爆発音にかき消された。

…

…

警報の数分前。

「ケヒヤヒヤヒヤッ、お前、園崎アカリ…エスカ・ルビーだなあ！」

下卑た叫びに足を止める、パトロール中のアカリ。

「誰っ!？」

「こつちだよ。小生、お前を探して地球の反対側から来てやったんだ。お前の息の根止めて、小生の研究論文の目玉エビデンスにするためになあ！」

ドワーフかゴブリンと見間違うほど小柄な白衣の男が、小高い崖の上からアカリにへイトを吐く。

「敵ですねっ！ いいでしょう。」

深呼吸を一つ、

「フラックスプローション・ビートチェンジ！」

漆黒の夜に輝く、真紅の閃光。

瞬間、人類の脅威を幾度も打倒してきた、希望の超昂戦士が両の拳を握りしめ、眼差しを凜と据え、大地に立つ。

「紅蓮の光は不滅の炎！ 超昂戦士・エスカ・ルビー！ 悪の現場に只今参上！」

「ケヒヒツ、期待通りだよお。それでは小生の研究成果、刮目せよ！」

男の横から現れた長身の女性は。

「…えっ！ あなたは…!!」

見間違えるはずがない。

アカリを超昂戦士にした、強き人。

ルビーが憧れ、今も背中を追いかける、ルビーの大切な人。

「エスカレイヤー……さん……!？」

ルビーの理性が、明確に彼女を否定する。

エスカレイヤーが、今ここにいるはずがない。

オルタナスタインとの戦いが明け、エスカレイヤー・高円寺沙由香は元の世界に一時的に帰郷している。

だが、その姿、その立ち振る舞い。

声に出さなくとも、ルビーの感じる全てが、崖上の戦士をエスカレイヤーと認めてしまふ。

そして。

「Dハーケン!」「きやあつ!」

エスカレイヤーの利き腕が最短最速の軌跡で繰り出す投擲兵器。

ルビーの居た場所に打ち込まれたハーケンは、ルビーの正中……眉間、喉笛、心臓を的確に狙い、岩を砕いて消滅した。

だが。

「ぐはあつ……あ……ああつ……かはつ!」

右へかわしたルビーを、鷲のように急降下し仕留めるエスカレイヤー。

ルビーの構えが一瞬遅れた間隙を突き、その右の拳がルビーのみぞおちを穿つ。

横隔膜をねじり上げる拳。肺の酸素を全て絞り出され、動きの止まるルビー。

その隙を襲う、拳と蹴撃の連打。

がつつ。どすつ。どがつ！

「がつ！ くふうつ、あああつ!!」

左フック、右膝蹴りからの左ハイキック。

ガードで勢いを相殺しきれず、ルビーは吹き飛び、冷たい地面に左肩から倒れ込む。

「う…ううつ、エスカレイヤーさん…どうして…?!」

ダメージに耐え、起き上がろうと、震える両腕に力を込めるルビー。

そこへ。

どすつ。

「がはっ!」

起き上がれないルビーを一瞥し、無様な敗者を辱めるかのように、エスカレイヤーが

放つ右足蹴り。

そのつま先はルビーの両胸を捉え、真紅の戦士は宙を舞い、2回、3回と地べたを転

がる。

直接の蹴撃のダメージに加え、衝撃波がルビーの戦闘フォームを破り、切り裂く。



ヴァーミリオンレッドのカラーはずたずたに千切れ、パールホワイトのレオタードは左胸から右脇腹まで、袈裟懸けにはだけていた。

「けひやひやひや、ひやーっっ!! 無駄だよお、お前の最も敬愛する戦士は、今や小生の忠実な手駒なのさあ。」

さあ、ルビー、しっかりその眼に焼き付けなあ、最愛の戦士の必殺技と、惨めなお前の敗北の姿をなあ!」

∴

『交戦中のルビー、映像、出ます!』

ようやく機動ドローンが臨場した。

「なっ∴、エスカレイヤー?!」

「リムナデスの因子は、仕留める相手の最愛の人を、周囲にも見せるんや! アレはルビーちゃんの憧れの人∴敵にしたら最悪の相手やあ!」

変わるアングルの隅、ルカは目敏く黒幕の小男を視線に捉えた。

「∴弟子よ、覚えているな。あの外道畜生を。」

「はい、忘れようにも忘れられへんのですわ。」

ドゴール∴生きとったんかい、ワレえ!!」

「知っているのか、あの男を?」

「ああ、同輩。我ら錬金術師の面汚しだよ。」

「あのボケは、『魔女の先祖返りから能力を引き出す』云うて、ウチら箱船の秘中の秘・血縁図を暴いたんや！ 平穩に暮らす魔女の四世を何人も拉致して、人体実験のモルモツトにしくさった！」

「我輩達は、ニルたちと共闘して隠しラボを急襲し、拉致被害者を確保したのち、ラボごと焚刑にしたはずだった、が……」

「どうやら落ち延び、あの人倫にもとる研究の続きでカノちゃんの因子に辿り着き、拉致して操り、ルビーちゃんにけしかけると、ちゅーことや……アホタレが……！」

……

どしやつ。

「う……ぐつ、ああつ……」

その後もエスカレイヤーの追撃は休むことを知らず。

川の激流の傍、大の文字を描き、仰向けで地面に四肢を預けるルビー。

「はあつ……、はあーつ、かは……つ……」

両足は痙攣し、本能で感じる生命の危機に応えるのは、僅かに動く両腕と首と腹筋。

（攻撃……来る……避けなきや……）

意思と裏腹に、もはやルビーは息も絶え絶え、僅かに体を浮き上がらせ、赤子のよう

に首をいやいや振るばかり。

そして、ここまでじわりじわりとルビーをいたぶり、拳と蹴りだけでスタミナを削ってきたエスカレイヤーが、遂に大技を繰り出す。

しゅっ。

ぐるっ、ぎしっ。

「きゃあっ！ ああっ、う…うわあああ〜っ！」

エスカレイヤーの選択は、彼女の相棒・パルシオン。

新体操のリボンのように描く円運動の軌道は、その優雅さと裏腹にルビーの首から両肩、両腕を胴ごと螺旋で包み、腰から上、ルビーの全てを冷酷に掌握する。

「か…かはっ…！」

（息が…できないっ…！）

パルシオンで簧巻きにされ、気道も肺も締め上げられるルビー。口を開くも、声にならない喘鳴音が響くばかり。

さらに追撃を重ねるエスカレイヤーは、右腕全体でパルシオンを振り上げる。

「ぐあっ…あっ、あああっ、あーっ！」

地を這うルビーが、一本釣りのように空に吊りあげられる。

「サブリミット・エスカレーション！」

刹那、リボンが閃光と轟音を放つ。

カッ…ドガー…!!

「あぐっ…くはあああ…!!」

ルビーはバネ仕掛けの人形のようにのけ反り。

リボンの拘束からようやく解放されるも、力なく墜落し、膝をつき、前のめりに卒倒した。

リボンの螺旋で締め上げた敵を、さらにリボンを収縮させ、DDDの全エネルギーで爆撃する、かつてはエスカレイヤー最大の攻撃力を誇った必殺技。

戦闘フォームの防御力で、辛うじて首と胴が分かれずに済んだものの、もはやルビーのスタミナは残り僅かまで追い込まれていた。

…

…

「ケヒヤヒヤヒヤ、ヒヤーツ！ あのエスカ・ルビーが、手足もがれてダルマ同然！

やつぱりユムナデスはバケモノだあ！ それを引き出した小生、やはりジューニアス！

さあ、とどめだあ！」

老婆のごとき奇声。

ドゴールの命令に背中を押され、無表情のエスカレイヤーが歩み寄る。

(あう…、うぐうつ…！)

一撃たりとも反撃できず、ルビーはただ、虚ろな目を地に向ける。

狩人は獲物に、最大奥義のポーズを取る。

左手を正面に伸ばしてルビーの躯体を照準に捉え、右手のパルシオンを天高く掲げ。

あとは振り下ろすだけで、エスカレイヤーの最強技、サブリミット・エスカレーショ

ンが発動する。

それは、避ける力も耐えるスタミナも残っていないルビーへの、引導を渡す一振り。

だが。

つう……つう。

奥義発動を遮り、色を失ったエスカレイヤーの瞳から溢れた、涙ひとすじ。

構えた右手は震えながら重力に逆らい、エスカ・ルビー完全敗北の瞬間を全否定しよ

うと、心と体の全てで、抗う。

(違う…違ううっ！)

イヤっ…イヤだあ…っ！

こんなこと…したくないっ…！)

「…たしは…、わだしは…！」

「あはっ…やっぱりカノちゃんだ…」

…!!

「ル…ルビー…さん…?」

「操られちゃったんだね…敵に…。」

「あ…ああつ…わだし、何てことを…!」

パルシオンを投げ棄て、満身創痍のルビーに駆け寄り、崩れ落ちるカノ。

真の名をルビーに呼ばれたカノは、インキュラブラーに支配されていた正気を取り戻す。いつしか、エスカレイヤーの幻覚は溶け去り、今日、初めて出会ったときのままの、素朴な田舎の少女がそこにいた。

「ごめんなさい…ごめんなさい…!」

「良かったよ…カノちゃんが、元に戻って…」

「!…ルビーさん、わだしを助けるために、反撃をしなかったんですか?!」

こくり。

苦痛に耐えながらも微笑を浮かべて僅かに頷き、ルビーはカノの問いを肯定する。

「そんな…今日初めて会っただけの、わだしなんかを護るために、こんつなに傷ついて…!」

「…うん、たとえ他人でも関係なく護るし、ゴハン一緒に食べたカノちゃんは、もう友達だもん…!」

「ルビーさん…っ！」

…ああつ、あああああーっ!!」

ルビーの慈愛と自らの暴虐の間で、カノは慟哭する。

「ケヒツ、リユムナデスが人間さま並みに泣いてんじやねえ！ インキュブラーを無駄に消費したくないんだが、今度はお前の脳味噌ぜんぶこいつで乗っ取って、ルビーもダイビートのお友達もあまねく無慈悲に食いちぎる怪物に変えてやる！」

ドゴールが取り出したのは、カノの正気を基地で呑み込んだ、小型のインキュブラー。それも、3匹入りのケージ。

それが意味するのは、カノの自我を消し飛ばしてでも、ルビーを、ダイビートを潰す実績を欲する、ドゴールの非道だった。

「ひっ…！ あ…あああつ…！」

ダメだ。

このままでと私は、あの男の思うままに乗っ取られ、ルビーさんを殺してしまう。

ならば…いつそ…！

カノは手鏡を取り出し、自分を見る。

見た人の大好きな人に変身して取り殺す、魔性の水棲妖魔・リユムナデス。

カノが変身したのは。

園崎アカリ。

「カ…カノちゃん…!？」

自分の鏡写しが目の前に現れ、うろたえるルビー。

「ルビーさん、ありがとうございます。」

わだし、まさか、世界を救った凄え人に、あんなに優しくしてもらえるなんて思わなかったっす。わだしの人生で、いちばんあったかかったっす…!」

「か…カノちゃん…何を…?」

「わりいこと、したっすから。」

自分がホジナシだったスから、

自分でケリを、つけるっすなあ。」

きびすを返し、ルビーをかばうように体をドゴールに正対させ、カノは。

「あんたの思うようには…させねえっ!」

激しい戦闘で砕けた、足元の岩。

ひとときわ鋭利な一つを。

ぐさっ。

自らの胸に突き刺した。

「あぐっ…ぐうう…ぐうう…!」



ドゴールも、そしてルビーも、一瞬のホワイトアウトの後、眼前の事態を理解した。「カノちゃんっ、カノちゃん!!」

「ケヒヤツ!!? …小生に操られるより、自らを食い殺す選択、だとお…!!」

よろけながらも、ルビーは自分の姿のカノに駆け寄り。

びりっ。じゃおおおっ。

自らのプリーツスカートを引きちぎり、直接カノの傷口を押さえて圧迫し、止血する。

「こんな…こんなことって…!」

「ルビーさんを…死なせたく…なかったんです…わだし…乗っ取られて、自分の本性、初めて見えて…わだし人をとり殺す、バケモノなんだって…」

「しゃべっちゃダメっ…!」

カノちゃんっ、生きて! 生きなきゃ、ダメだよおっ!

バケモノなんかじゃ、ないから!

私たちと、いっしょだからあーっ!!」

ばさっ。ばささっ。

「ルビーさんっ!! 私が全速力で搬送します!」

「いいや、私『たち』よっ。任せてっ!」

夜空からメイファールとキリエル、降臨。

「ルビー！ すまない、待たせた！」

エスカチームとナリカも臨場。

「あああああつ、こんな選択が、あるかーっつ!!? 愚鈍、不合理、誤謬！」

この田舎つべ、下等極まる愚劣なケダモノがああーっ!!」

「黙れ下衆が！ カノが愚劣な獣だど!? 貴様はまず鏡を覗き込め！」

「ニセヒーローに本物を倒させるなんてベタな陰謀、とつくに使い古されてんのよっ！」

ダイビートの精銳5人がドゴールに対峙し、既に形勢は逆転したが。

「月夜に悪を討つは、我ら閃忍の務めだけど。」

「魔女の不始末、私が落とし前をつけるのがスジだけど…それじゃ許さない子がいるの

よね。」

ずたぼろの五体は立つのもやっど。

それでも右手を横に伸ばし、手のひらを4人に向け。

ルビーは皆を制止し、眼前の外道に、静かにその激情を投げ打つ。

「私は…超昂戦士になって以来、こんなに敵を憎いと思つたことは、ありませんっ…！」

「ふんっ、満身創痍のくせに！ リュムナデスは潰れたが、インキュブラー3体、残し

てあるのを忘れたかあ、バーカ！

かくなる上は、小生自らお前をぶちのめし、実験体にしてやるぞお。アイデアの壁で幽

閉して、他から連れてきたリユムナデスで心をへし折るまでよがり狂わせて、余さず論文エビデンスで晒して！ 小生を認めなかつた愚鈍な錬金術師どもに、吠え面かかせてやらあーっ!! ケヒヤヒヤヒヤヒヤッ、ピャーっ!!」

「そんな、ことのこと…」

「ヒヤッ?」

「そんなことのために、カノちゃんを悲しませたんですかあーっ!!」

ルビーの瞳に浮かぶ、蒼い雫と紅蓮の業火。

「フラックスプローション! ビート・エヴォリューション!!」

超昂変身・エスカルビー・アステライズ。

「人の心を踏みにじる、あなたなんか!!」

私は、絶対、負けない!!」

「ヒヤケーンツ!!」

インキュラブラー3体を自ら取り込み、いよいよその心のみでは飽き足らず、身体をも人ならざる位置まで墮としたドゴール。

数百年かけて生きとし生けるものの苦悶を取り込み、腐敗に腐敗を重ねたインキュラブラー。

その残渣が醸し出す、病・老・苦の全てに身をやつし、そうまでして最期に求めた名

声。

世界の救済者、エスカ・ルビーの首を自らの研究成果と学会に差し出す、狂いし彼の野望は。

「スターバースト！ エスカレーション!!」

雨上がりの澄んだ星空の下に、潰えた。

…

…

「アカリさん…、ありがとう、ございました。もうリユムナデスの力は弱って、ルカさんとプカルルさんの薬をきちんと飲み続けられれば、抑えていけるらしいです。」

「カノちゃん…良かったよお…」

ダイビート最速の救急隊二人による搬送と、医務室の夜勤当直・ユユエルの適切な治療。何より、ルビーの応急止血の適切さで、カノは一命を取り留めた。

入院加療を要したものの、見舞いに実家から訪れた母親と、これまでのすれ違いを修正し、心を通わせ合うことができた、かけがえない2週間となった。

「あんた、帰っちゃおうの？ せっかく魔力因子の正体もわかったんだから、魔女としてダイビートと一緒に戦おうよ。もう『ニセガツパー!』なんて言わないからさー。」

「うららさん、ありがとなス。だども、わだしの戦い方だと、ダイビートが卑怯者集団に

なってしまうっスから…」

「あ…いや、一周廻って、かつてない新機軸ヒーローかもっ！ 悪を討つなら許されるっ

！」

いっつ。

「無理強いはやめろ。」

「痛てーっ！」

あにすんのよっ、ヒビキーっ!？」

「戻ったら、今度は学校さ通って、母ちゃん、安心させるっス。遠回りしたっスけど、必ず卒業して、戦闘スタツフでなくても、いつかダイビートの職員になりてえって思ってるっス。…アカリさん、わだし、頑張るっス！」

「カノちゃん…!」

「年一回、定期検診で、こっちさ来るっス。またゴハン、一緒に食ってけるっスか？」

「うんっ、あのお鍋、すっごく美味しかった！ 楽しみにしてるから、絶対来てねっ！」

…

…

かつて世界中の人類を脅かし、幾千幾万もの心を喰らい尽くした妖魔・リュムナデス。

そして、彼女たちを迫害し撲滅寸前に追いやった先人。

対抗策も防御力も持ちえなかった時代ゆえ、後世の我々がその心の弱さを責めることはできない。

一方、現代に蘇ったその脅威に、人類は打ち克った。その勝因は、心正しい少女の慈愛と、少女の至誠に心打たれた妖魔が振り絞った、勇氣。

今はその事実を後世に伝え記し、近い未来の共生を希求するのみである。